

高野山新別所の石造露盤について

木 下 浩 良

はじめに

高野山新別所（現在の真別処円通律寺）に、鎌倉時代にさかのほる石造露盤が存在することを報告されたのは、愛甲昇寛氏であった。その発表以来、その遺物を確認すべく、同寺院を幾度も来訪し調査させていただいたが、残念ながらまだその石造露盤を実見するに至ってない。

高野山においては、石造露盤の事例報告はこの新別所の他に無く、現状では唯一の資料である。またこの石造露盤は、新別所の変遷史上においても貴重な資料として位置づけられる。そこで、ここに平安末～鎌倉時代の新別所に関する史料をあわせて紹介し、若干ながら、石造露盤に対する新知見を述べてみたい。大方の示教をいただければ幸いである。

1、石造露盤の復元

先ず、愛甲氏の報告にもとづいて、石造露盤の復元作業を試みてみたい。愛甲氏が報告されたのは、今から約30年前の昭和56年4月のことであった。『石塔工芸』第1巻第7号所収の「高野山の石塔群Ⅱ」の中で、次のように記されている。

「石製露盤 真別處の墓地近くに所在する。砂岩製、半数以上が欠失し、請花のごく一部と、伏鉢・露盤の三分の一くらいが残る程度である。露盤は六角形、各区に輪郭を巻き、内部に横長のびやかな格狭間を配する。その一辺の長さは三六cm、高さ一四・五cm。鎌倉時代後期の制作と認められる。」

(2)

この報告とともに、石造露盤の一区全体とその中に刻された格狭間の拓影の図版を掲載された。図1は、その愛甲論文からの転載である。

この紹介文と拓影により、筆者が復元したのが、図2の復元実測図である。幅72cm、側面の高さ14.5cm、伏鉢の高さ4.8cm、請花の高さ3.2cm、宝珠の高さ11.6cmとした。この六角形の石造露盤は、全国的にみても未だ報告例がなく、この石造露盤が唯一の遺物である。石造物を研究する上からは、そのことだけからも注目される。

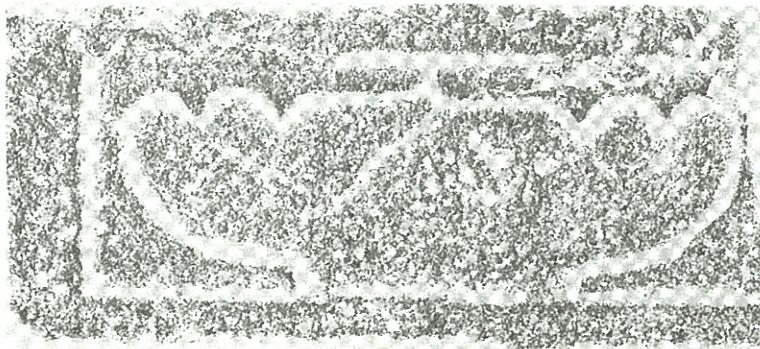


図1 高野山新別所の石造露盤の側面の拓影

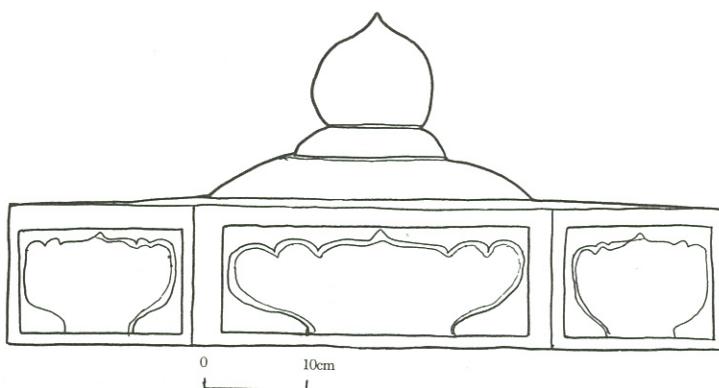


図2 高野山新別所の石造露盤復元実測図

2、時代の推定

露盤とは、隅棟が屋根の中央に集まり大棟のない形の宝形屋根の頂部に伏せる箱型の建築部材のことである。四角の方形屋根なら四角、八角屋根なら八角平面となる。瓦や金属製が多いが、その露盤を石造にしたもののが奈良時代からみられ、それを特に石造露盤と称する。平安時代までのものは数基しかなく、鎌倉時代に入って20基程が見出されている。その数は少なく、特殊な遺物といえる。

南北朝時代以降、露盤は瓦製のものが使用されて石造のものが姿を消したとされているが、一部の地域からは室町時代から江戸時代の遺物も見出されている。露盤を石造にした理由は、石造のものは永久性があり、建造物が永遠に存続することを願ってのことだと考える。建造物の頂点の部材の露盤を、その意味で石造としたのであろう。

問題は、この新別所の石造露盤が、どの時代に造られたものか、である。愛甲氏は鎌倉時代後期と推定なさっている。筆者は、この石造露盤について、平成23年3月刊行の『高野町史（民俗編）』第二部第四章「高野山の石造物」で私見を述べた。

本稿掲載の復元実測図も、その『高野町史』に掲載したものであるが、前稿では鎌倉時代初期と推定した。今、振り返ると、この時代推定はいさか遡らせ過ぎた観がする。鎌倉時代には違いないが、少し時期を下させて、鎌倉時代中頃の遺物であると修正しておきたい。その根拠は、格狭間の形態である。

平安時代後期の格狭間は、両側の曲線がゆるくふくらみぎみであるのに対して、鎌倉時代のものはそれが引きしまって力強さがみられるようになる。この石造露盤の格狭間は、その平安時代後期と鎌倉時代のものとの中间的な要素が見られる。そのため、鎌倉時代中頃と推定する。

3、新別所における石造露盤の位置づけ（文献史料の面から）

次に問題となるのが、その石造露盤が新別所のいかなる建造物の建築部材なのかである。この点については、新別所の歴史を見逃すことができない。

新別所の開基は、空海の十大弟子の一人の智泉とされている。智泉の没後に荒廃し、再興したのは、奈良東大寺再建の大勧進職をつとめていた俊乗房重源（1121～1206）であった。

新別所は、それ以前に開かれていた山内の小田原別所、中別所、東別所に対する呼称であった。重源は新別所専修往生院と称する、専修念佛の道場を高野山に開いたのであった。

重源と高野山との関係を知る資料が、和歌山県紀美野町泉福寺所蔵の高野山延寿院旧蔵の安元2年（1176）銘の梵鐘である。その梵鐘銘文には、「高野山延寿院、奉施入鐘一口、為僧照靜僧聖慶源時房、尼妙法兼法界衆生也、安元二季二月六日、勸進入唐三度聖人重源、願主尼大覺」とある。⁽¹⁾ 県内で最も古い梵鐘であり、銘文によって重源が勸進して鋳造された、高野山延寿院の梵鐘であったことが知られる。

高野山専修往生院、すなわち高野山新別所の建立が、重源によっていつはじめられたかは、明確にしえない。江戸時代の編纂になる『高野春秋編年輯録』（以下、『高野春秋』と略）によると、文治3年（1187）4月24日の条に「重源法師字俊乗房房絶新別所蓮社之交、赴鎌倉」と記されている。この記事を信じると、新別所専修往生院は文治3年（1187）以前に完成していたと推測できる。

「新別所」の名称が見られる明らかな史料としては、西南院所蔵の『和泉往来』（国指定重要文化財）が挙げられる。現存最古の往来本とみなされる本書の奥書に、

新別所申時許書写了

金王丸也

文治貳年 四五月 書写了

とある。この奥書から、本書は文治2年（1186）新別所において、金王丸が書写したことを知りうる。これより、文治2年には新別所専修往生院が存在していたことは間違いない。

では、重源は新別所専修往生院において、いかなる建築物を建造したのであろうか。重源自らがその生涯にわたる作善活動を備忘録風に書き上げた「南無阿弥陀仏作善集」と、「重源譲状」によると、高野山新別所専修往生院には、「四面」の「小堂一字」と、「三重塔一基」「食堂一字」「湯屋一字」の四棟の建物があったことが知られる。

史料に「小堂」とあるのは、新別所専修往生院の本堂のことであろうが、「四面」とあることにより、いまとりあげている石造露盤とは関係しない。「三重塔」については、今に現存する多重塔で六角のものは存在しないし、問題の石造露盤は宝形造りの建造物の頂点を飾る部材であり、その可能性はない。残る、「食堂」「湯屋」については、六角形の意匠をこらしたものだったとは、これも考えられない。

前稿においてこの石造露盤を重源時代の遺物と比定したため、見誤った見解となった。本稿では、その成立を鎌倉時代中期頃としたが、その頃は、もはや重源は没していて、新別所専修往生院そのものの性格や建造物も変遷していたことが推察される。

そのことを最も端的に指摘する史料が『高野春秋』である。そこには、重源以降の新別所の様子を、「嘉禎已來無人_レ來樓_ニ」と述べる。嘉禎年間（1235～1238）以来、新別所を訪れる人はなくなったと伝えているのである。

そもそも、高野山新別所専修往生院ができた訳は、『高野春秋』によると、「文治年中。俊乗房重源上人廿四友之蓮社於_ニ此谷_ニ結_ニ構_ニ之_ニ。号_ニ新別所_ニ」とある。つまり、24人と重源自身を合わせた25人の構成になる講の存在があり、二十五三昧講の信仰集団のよりどころとして、高野山新別所専修

往生院があったのである。

新別所について、調査研究の先鞭をつけられたのは、五来重先生である。五来先生は『発心集』などの史料にもとづき、24人の信仰集団には、平安時代末期の大動乱期に政治的に失脚して高野山に遁世した、参議正三位藤原成頼などの著名人がいたことを明らかにされた。⁽⁷⁾

新別所専修往生院は、いわば現在でいうところのホスピスとしての性格があった。25人の信仰集団の一人ひとりの臨終に際して、互いが看取りあった様子が考えられている。『高野春秋』の「嘉禎已來」新別所への来訪者がなくなっている様相とは、重源が没した建永元年（1206）以降、新別所専修往生院がいかなる顛末となったのかわからない。重源亡きあと、残された24人はそのまま新別所に留まったのか否か。想像をたくましくすると、それら24人は、嘉禎年間までに新別所で死亡してしまっていたことも伺わせる。

ただ問題は、ここに紹介した石造露盤の成立時期を、鎌倉時代中頃と比定した私見である。筆者のいう、鎌倉時代中頃とは文永・弘安期（1264～1288）ころをさす。『高野山春秋』の記述を信ずると、新別所には新たな建物が建造されたことは、想像できない。この点が筆者の見解と反目するのである。しかし、石造露盤の存在は、重源以降の鎌倉時代中期ころに新たに建物が建てられたことになる。この点をいかに解釈すべきか。このことを考える上で貴重な文献史料がみつかった。それは、文永・弘安期（1264～1288）より少し下った、永仁4年（1296）の「大僧正頼助讓⁽⁸⁾状案」である。全文を紹介すると、次のようになる。

譲与

醍醐寺理性院／主職付寺領

高野新別所院／主職付寺領

山階空禪上人跡

右譲与親助僧都之状如件

永仁四年二月廿三日

前大僧正在判
(頼助)

これより、永仁4年（1296）当時の高野山新別所の院主職が大僧正頼助にあったこと、しかも、新別所は寺領を有していたことが明らかになった。何よりも、重源以降も高野山新別所は寺として機能していたのである。本史料にはじめて注目されたのは、湯山学氏であろう。湯山氏は「頼助とその門流 – 北条氏と真言宗（東寺）」⁽⁹⁾で、頼助の生涯を概観されている。ただ、筆者が本稿で問題視する高野山新別所については、一切触れられてない。

大僧正の頼助とは、鎌倉幕府の執権北条経時の子で、北条時頼の甥にあたる。上洛して守海、良海、法助ら当代一流の高僧から法を受ける。醍醐寺理性院、仁和寺真乗院を管領。弘安6年（1283）には、北条一族としてはじめて鶴岡八幡宮別当となり、さらに東寺長者、東大寺別当といった中央大寺院の要職を兼帶した。

高野山との関係では、高野山町石のなか、頼助は百十八町石の施主となっている。⁽¹⁰⁾弘安8年（1285）十二月の霜月騒動の後は、失脚した安達泰盛に代わって、頼助が高野山金剛三昧院を管領する。⁽¹¹⁾何故、頼助が高野山新別所の院主となったのかは、分からぬ。この点についての考察は、他日を期したい。

いずれにしても、高野山新別所は、嘉禎年間（1235～1238）を下る、永仁4年（1296）までは確實に存在したことが、実証されたのである。

4、新別所における石造露盤の位置づけ（考古資料の面から）

次に、考古資料から高野山新別所についてアプローチしてみたい。昭和43年春、新別所の北方の弥勒峠と円通律寺の中間地点の山道に散乱する土器片を表面採集したのは、当時、立命館大学生の中村浩道氏であった。⁽¹²⁾その時の成果は、「高野山真別処北遺跡出土遺物について」と題して公表された。本稿においてもその中村論文に挿入の出土遺物実測図をそのまま

(8)

掲載する（図3参照）。瓦器碗（1～3）・土師質皿（4～7）・土釜（8）・小皿（9）である。年代の判定可能な遺物は、瓦器碗で1が平安時代末、2と3が鎌倉時代前半期と中村氏は比定なさっている。

この瓦器碗の時代判定について、和歌山県下における瓦器碗専門の渋谷高秀氏（和歌山文化財センター事務局長兼文化財建造物課長）に実測図による見解を求めたところ、中村氏の時代判定に間違いないとのご教示を得た。1の瓦器碗はまさに重源が高野山新別所を開いた時期と符合する。2・3の瓦器碗は鎌倉時代前半期という70年程の期間の間の遺物とされてい

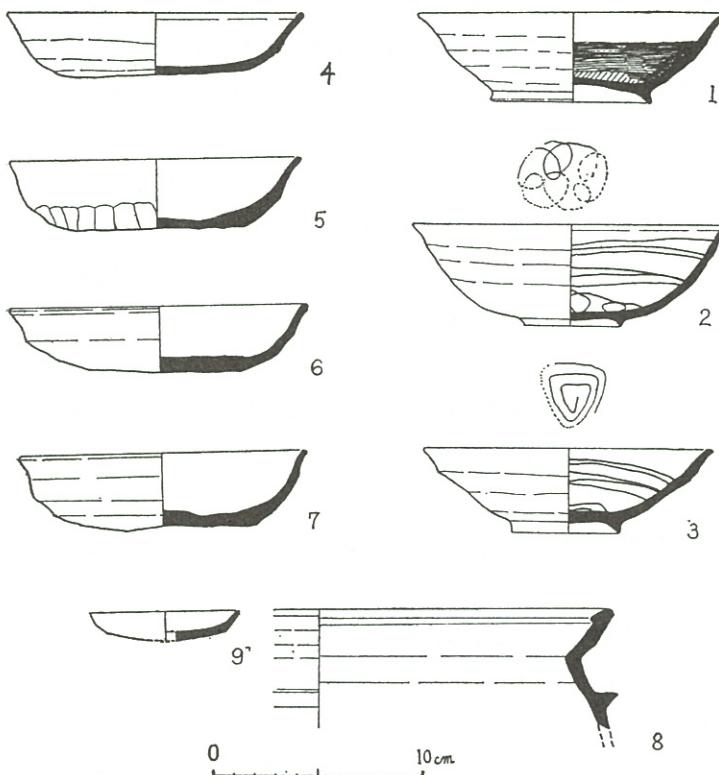


図3 高野山真別処北遺跡出土遺物実測図

る。上限はもちろん重源の時代となるが下限は、高野山の町石が造立される直前の頃となる。他の遺物は一括して平安時代末から鎌倉時代前半期とされる。考古資料からも、重源以降の資料が見られることを強調したい。

次に紹介したいのが、真別処円通律寺の墓地内にある石造物である。大半は、江戸時代の石造物であるが、その中に混じって鎌倉時代の五輪塔の残欠が5点見られる。いずれも砂岩製で、その中でも、注目されるのが、空・風輪を一石で造る高さ31cmのものと（図4の実測図参照）、幅35cmの上端に火輪を受けるための円形座柵を造り出して奉納孔をうがった水輪である

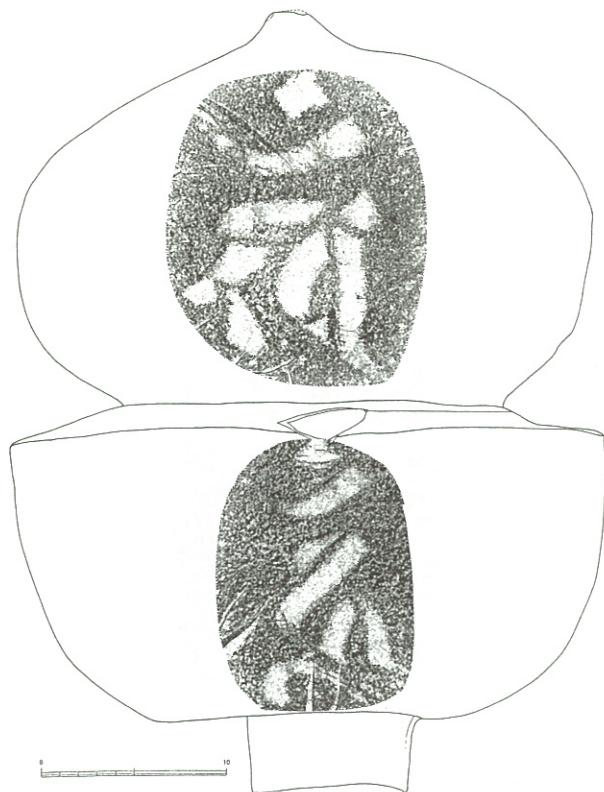


図4 高野山新別所の鎌倉時代中期五輪塔空・風輪実測図

(10)

(図5の実測図参照)。

この両者の五輪塔残欠は形状から見て、鎌倉時代中頃の弘安年間（1278～1287）のものと推定する。しかも、その大きさは全体にひとまわりは大きい、著者が管見にある高野山の鎌倉時代の同時期の遺物の中では、最大級の遺品と考える。梵字も、大きな葉研彫で、時代に見合ったものとなっている。これほどの五輪塔を造り得た人物は誰であるか、銘文が刻されていたかもしれない地輪部分は見出せないが、相当の経済的背景がなくては造立できないものである。あるいは、二十五三昧講の信仰集団の五輪塔とするには、いささか時代が下るが、種々の面で興味が尽きない五輪塔の残欠品である。

この他にも、幅28cmと小型の水輪であるが、その形は鎌倉時代中頃の遺物と見られる。他に、小型の空・風輪が2基あるが、これは少し時代が下って鎌倉時代後期の遺物と推定される。

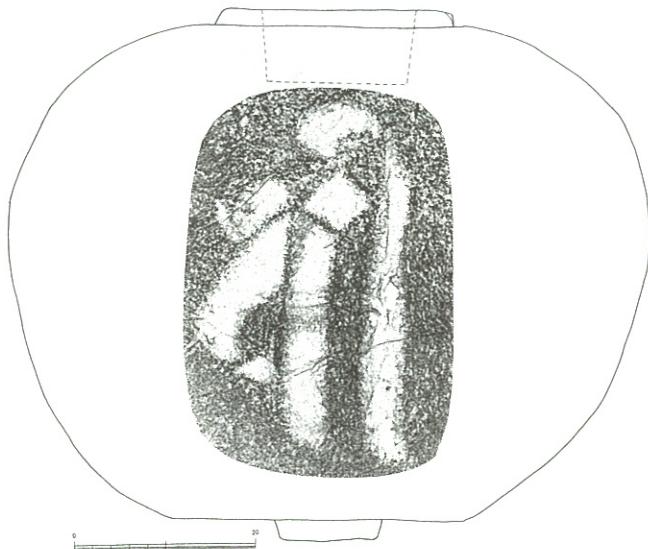


図5 高野山新別所の鎌倉時代中期五輪塔水輪実測図

いずれにしても、考古資料からも高野山新別所は、嘉禎年間（1235～1238）を90年程下る、13世紀末から14世紀初頭の鎌倉時代後期までは確実に存在したことが、実証されるのである。

なお近年、鎌倉時代における高野山の、噙合わせ五輪塔の発生を重源に起源を求める新説が元興寺文化財研究所の狭川真一氏から提唱されたが、⁽¹³⁾ 同遺物の高野山における上限は弘安期であり、重源没後70年程が経過している点から、筆者はこの狭川説には同調できない。

おわりに

以上、新別所の石造露盤を紹介するとともに、関連する新別所のその他の史・資料を挙げてみた。今回、筆者は問題の新別所の石造露盤を鎌倉時代中期ごろの製作と推定したが、その時代判定には、いささかの無理もない、石造露盤だけが突出した資料ではないことを改めて強調したい。

問題は新別所の石造露盤が、六角形であることである。六角形の建物となると、高野山奥之院では御廟の横にある骨堂が挙げられる。要は、死者供養のための建物が六角形の六角堂であるケースが多い。このことは、全国的にも類例をあげることができる。石造物からは、六角形の遺物となると、六地蔵石幢が挙げられるが、その地蔵菩薩は閻魔大王の本地仏とされているように、死者供養には重要な地位にある菩薩である。

鎌倉時代中頃に、死者供養の施設が高野山新別所にあったのではないかと、推定させる石造露盤は、貴重な資料であることには違いないのであって、今後さらに同資料の発見に努めたい。

最後になったが、本学教授の武内孝善先生からは、本稿の校正の段階で有益な助言を得た。記して感謝の意を表したい。

(12)

註

- (1) 坪井良平「紀伊泉福寺鐘」『考古学』第6卷5号（昭和10年5月）所収。
- (2) 遠藤嘉基「高野山西南院藏和泉往来について」『語文研究』10号（昭和35年5月）所収。
- (3) 「南無阿弥陀仏作善集」（『美術研究』30号（昭和9年6月）翻刻紹介）。
- (4) 「重源讓状」『大日本史料』第四編ノ九所収。
- (5) 『高野春秋』慶長十八年九月の条。慶長18年（1613）、再度荒廃した新別所を再興したのが、山口修理亮入道重政であった。この時、新別所は真言律宗化して今に至っている。
- (6) (註5) に同じ。
- (7) 五来重『高野聖』（昭和40年5月）
- (8) 東京大学史料編纂所編纂『大日本古文書 醍醐寺文書之二』（昭和33年11月）三四九文書。
- (9) 湯山学「頼助とその門流 - 北条氏と真言宗（東寺）-」『鎌倉』39号（昭和57年12月）所収。
- (10) 木下浩良『はじめての「高野山町石道」入門』（平成21年11月）
木下浩良「『高野山名所図会』所収の町石卒都婆銘文のいくつかについて」『仏教学会報』15号（平成2年8月）所収。
- (11) 「金剛三昧院住持次第」『高野山文書』第五卷 金剛三昧院文書（昭和11年6月）所収。
- (12) 中村浩道「高野山真別処北遺跡出土遺物について」『密教文化』86号（昭和44年2月）所収。
- (13) 狹川真一「高野山周辺の噛合式五輪塔をめぐって」『高野山中世石造物の実態を探る』（平成16年8月）所収。